Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞Gary Genosko, The Reinvention of Social Practices : Essays on Félix Guattari
Author(s)	香川, 祐葵
Citation	共生学ジャーナル. 2020, 4, p. 189-196
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75392
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

Gary Genosko
The Reinvention of Social Practices：Essays on Félix Guattari
Rowman&Littlefield Intl, 2018, 225 頁

香川　祐葵*
Yuki KAGAWA

1. はじめに

本書は、フェリックス・ガタリ(1)の研究者であるギャリー・ジェノスコの最新作(2)であり、ガタリの考案したスキゾ分析(3)を現代的観点から実践的に捉えなおす試みである。

ドゥルーズ研究が盛んに行われる近年、ドゥルーズの共著者として副次的にガタリが取り上げられることが多い中で、本書は単独でのガタリに焦点を当てている。著者のジェノスコは、カナダのオンタリオ工科大学の教授であり、ガタリの思想を中心に社会思想や政治思想を専門としている。また、マーシャル・マクルーハン、ジャン・ボードリヤールの専門家でもあり、メディア論に精通していることから、本書をはじめとするガタリに関する著作でも、メディア論の観点からガタリ思想を取り上げている点が特徴的である。ジェノスコは、*The Guattari Reader*（1996）、*Félix Guattari：An Aberrant Introduction*（2002）などガタリに関する著作を多数執筆しているが、日本語で読めるものは 2018 年に *Félix Guattari：A Critical Introduction*（2009）の翻訳として出版された『フェリックス・ガタリ――危機の世紀を予見した思想家』のみである。

2. 構成

本書は４部構成である。第１部では、著者が現代の社会的・政治的状況をガタリの思想を発展させながら分析している点が特徴的である。第１章は、著者自らが参加した経験をもとに、現代におけるスキゾ分析的実践の場で

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系（shikakawayouki@yahoo.co.jp）

ある、カナダのトロントの中心部にあるオルタナティブスクールの活動を紹介したものである。第 2 章は、カナダのイヌイットやオーストラリアのアボリジニのかつては平滑的であった空間が、いかにして情報によって条理化されるのかについて考察されている(4)。第 3 章は、ガタリが「ポスト・マスメディアの時代」と呼んだ、一方向的なマスメディアの時代を越えた双方向的で創造的なメディアの使用について、現代のメディア状況も踏まえながら著者が再考したものである。

第 2 部では、ガタリの個人史を交えながら、特に精神的な諸問題に焦点を当てる。第 4 章は、ガタリの『カフカの夢分析』をモデルにしながら、著者がアメリカの芸術家デイヴィッド・ヴォイナロヴィッチの夢分析をしている。第 5 章は、ガタリの「冬の時代」の思想におけるフランコ・ベラルディの評価についてである。「冬の時代」とは、政治的にも個人的にもガタリが身動きの取れない状態にあった 1980 年代を指す。神経症や分裂症など精神病理について思考してきたガタリが語らなかった鬱の視点からガタリの思想を再評価する点が本章の特異な点のひとつである。第 6 章は、ドラッグと主体形成がどのように関わっているのかを、ガタリの独自の概念であるブラックホールとの関係から説明している。

第 3 部は、共著で有名なドゥルーズをはじめ、もう一人の共著者アントニオ・ネグリやイタリアの活動家フランコ・ベラルディ（ビフォ）、フランスの思想家ポール・ヴィリリオ、人類学者バルバラ・グロソウスキといった、ガタリと交友関係にあった知識人たちとの関係からガタリの立場を明らかにしていく。第 7 章は、ドゥルーズ＝ガタリの共同研究においてガタリの存在が軽視されがちな風潮に対する批判である。第 8 章は、アメリカの左翼活動家ジェリー・ルービンの著書 *Growing（up）at Thirty-Seven* のイタリア語版の翻訳の序文にネグリが書いた、アメリカのヒッピーとイタリアの反権威主義者の若者のサブカルチャー的形態の類似についてである。第 9 章は、ヴィリリオとガタリの理論における癲癇の役割について考察したものである。第 10 章は、ガタリアンの方法論や政治参加について述べられている。

第 4 部は、ガタリの実践的な分析の方法論である。第 11 章は、構造主義や言語学の「意味」から逃走線を引くにはどうすればよいかについての記号論的で抽象性の高い説明である。第 12 章は、ガタリが編集していた雑誌『ルシェルシュ』の、クィアをテーマに取り上げた号の出版において立ち現

れた政治的問題を扱う。第 13 章は、ガタリの学際的で実践重視の研究方法についてである。ガタリは、既存のモデルに当てはめて思考するのではなく、様々な分野を横断しながら研究する中で、モデル自体を自分で作りあげる「メタ - モデル化」という方法を取った。ガタリのこの学問に対する態度は、本書のジェノスコの構成にも反映されている。

各部テーマごとにある程度の連続性はあるが、基本的には各章が独立した論文集の形式となっているため、読者は自分の興味に従って読みたい章から始めてかまわない。各部の前にはそれぞれの章の内容を端的にまとめた紹介文があるので、まずそちらに一通り目を通すことをおすすめする。また、本編全体を通して、説明なしに専門用語が頻出するほか、ガタリの交友関係や経歴を前もって知っていなければ文脈が捉えにくい箇所が散見される。そのため、読者はフランソワ・ドスの『ドゥルーズとガタリ――交差的評伝』におけるガタリの経歴を併読することが望ましいであろう。

3. 集団の活動と主体形成――第 1 章の検討を通して

本書はさまざまなテーマを横断的に論じた論文集であるため、本論においてすべての章について詳しく扱うことはできない。そのため、ここからは第 1 章の内容紹介をすることで、本書の内容紹介に代えさせていただく。

本章は、ガタリの分析に倣って、著者自身が現代のカナダにあるオルタナティブスクール活動を分析したものである。ガタリ自身の実践紹介が『フェリックス・ガタリ――危機の世紀を予見した思想家』の第 1 章なら、本章はそこで記述された分析の実践的発展と言えよう。そのため、各書の第 1 章を比較することで、ジェノスコがガタリの実践をいかに現代の文脈に応用しているかが読み取れる。

しかし、本章において特権的な位置を占めるのは、ガタリのスキゾ分析よりもむしろフランスの教育者セレスタン・フレネの実践だと言えるだろう。もちろん、著者の分析対象が教育の場であることもフレネを参照する理由の一つだろうが、より重要なことは、スキゾ分析がフレネの教育実践から大きな影響を受けているという点である。ここには、スキゾ分析のルーツの一つをあえて前景化させることで、スキゾ分析への理解を深めようとするジ

ェノスコの戦略が読み取れる。

ジェノスコは、ガタリが生涯を通してフレネの業績に言及し、ラボルド病院での治療にフレネの教育実践を適用しようとしたと述べる（Genosko 2018:7）。そもそも、ガタリがフレネに注目するきっかけを作ったのはウリ兄弟だった。兄のフェルナン・ウリはフレネの弟子であり、フレネの思想を発展させた制度論的教育学の第一人者である。若き日のガタリは、フェルナンの影響からユースホステル運動に参加し、そこで集団と制度に関する実践の基礎を体得する。そして、後にフェルナンの紹介を通して出会うことになる弟のジャンと、ラボルド病院で制度論的精神療法を行い、これらの経験がガタリ独自のスキゾ分析に発展していくのである。

制度論的精神療法とは、簡単に言えば、患者の治療環境も含めて改善することで、分裂症（統合失調症）をはじめとする様々な精神的失調を治療しようとする独自の治療法である。その内実は、医師と患者の垣根をできるだけなくし、患者が病院の制度作りに積極的に参加することで、社会的な場で主体性を獲得することを目的としている。具体的な集団的実践としては、ガタリが発明した「グリッド」という役割分担表を使って、医師、スタッフ、患者の区別なく院内の仕事を分担するという実践や、患者も医師も平等に発言権を持った会議、集団での雑誌の作製、映画製作、演劇活動などがあった。

当時のヨーロッパの精神病院では、患者は生涯病床に縛り付けられ、薬で衝動を抑えながら外界との接触を断つというのが一般的であったのに対し、これらの風潮に批判的だったラボルドの医師たちは、医師と患者の権力関係を転倒し、既存の制度や関係性から自由になることで、各人が自分らしく意欲的に生きる道を自ら見つけることに治療の意義を見出した。ガタリは、この各人が自らの生きる場所を作り出すことを「地図作成」という特有の言葉で表現しており、彼の著作の中でも幾度となく使用される。

さて、先ほどフレネの実践がラボルドでの制度論的精神療法やガタリのスキゾ分析に影響を与えたと述べたが、その内容を比較してみよう。フレネもまた、伝統的な教師と生徒の上下関係に疑問を持ち、教室における教師の立場を脱中心化することを試みた。また、生徒の主体形成のために「学内印刷所」を置き、学校新聞などを通して、生徒が自主的に作文・印刷・出版する環境を整えた。国から指定された標準的な教科書を使わず、生徒の主体性を重視したフレネの教育は、“教師が生徒に教える”学校ではなく、“生徒が

自ら自分の学校を作りあげていく”ものであった。また、協同会議という生徒主体の会議を通し、与えられた制度のもとに活動するのではなく、自分たちで制度を作りあげる場もあった。

権威関係の転倒、自主性の尊重など、フレネ教育の自由で主体的な空気感をガタリやジャンは自らの病院にも取り入れようとした。フレネの教育法とラボルドでの実践の類似は上記の内容からも明らかであろう。そして、この類似性に着目したジェノスコは、フレネの教育実践も視野に入れながら、現代におけるガタリ的実践の場を身近なところに発見したのである。ジェノスコの訪れたオアシススケートボードファクトリーは、スケートボードを通して生徒が主体的に自らを表現するオルタナティブスクールであった。ビルの一間に借りられた教室では、授業という形式の下で、スケートボードのデザインから、関連雑誌やグッズの製作・販売まで、生徒主体で行われていた。そこでの実践が、フレネやガタリの実践と非常に類似したものであることを、オルタナティブスクールでの活動の詳細や、そこでの制度の在り方を通して、ジェノスコは詳述していく。

伝記的記述が多い中で、特出すべきはジェノスコが集団的活動の媒体に注目していることだ。以前からジェノスコは媒体の重要性を説いていた。この媒体はフレネにとっては学内誌や協同会議であり、ガタリにとっては生涯関わり続けた数々の雑誌の製作であったとジェノスコは述べる（ジェノスコ 2018:61-66）(5)。雑誌をはじめとする媒体は、教師と生徒というような一対一の関係の外部にあり、その媒体を通じて集団で試行錯誤を重ねることで制度が組織されることを、ジェノスコはフレネやガタリの実践から読み解く（この媒体はガタリ独自の用語である「言表行為の集合的編成体」とも言いかえられる）（ジェノスコ 2018:61）。主体的な集団をつくる上で媒体が重要なのは、集団としてのまとまりを保ちつつも、一方（教師や医師）から他方（生徒や患者）への強制になることを防ぐことができるからだろう。権力関係に基づく制度を脱し、主体的に集団が活動できる環境をつくること、そしてそれにより一人ひとりが自分自身で生き方を見つることは、教育の場であれ、治療の場であれ、これらの実践における第一の目標であり、ガタリの実践の本質でもある。

ジェノスコが目にしたオルタナティブスクールにおいては、スケートボードやそれに関係する雑誌の作製が媒体だった。また、学校を訪問にする多

方面の専門家との出会い(6)や注文・販売の過程で不可欠な外部の人との出会いによって、学校は教室の外にも開かれていたため、媒体であるスケートボードを通して生徒は自分たちの周辺の地域社会とのつながりも形成していった。ここに来る生徒は主流の学校に落ちたり、一般的な学校に馴染めなかったマージナルな者たちだったが、彼らは自分たちの取り組みを通して、既存の制度に合わなくても、自分たちで社会とのつながりを構築しなおすこと、そこから自らの居場所を見つけることができることを証明している。ジェノスコは、オアシススケートボードファクトリーが現代におけるスキゾ分析的な実践の場であることを提示することで、今でもスキゾ分析的実践が機能しうることを示そうとしたのではないだろうか。

4. おわりに

ガタリの著作は、抽象的な概念を複雑な図式を用いて説明する傾向がある一方で、他方では現実の社会的・政治的な細かい文脈における具体例も多く出てくる。本書をはじめとするジェノスコの著作も、ガタリに倣い、細かな文脈を大切にする傾向が見られる。著者自身の活動に関する具体的記述や、本編全体に散見されるガタリの細かな経歴は、思想家の理論を扱う著作としては一見すると細部にこだわり過ぎているようにも思われる。また、ガタリの経歴を知らないと理解しがたいような記述も数多くある。しかし、このジェノスコの（そしてガタリの）現実の具体的な文脈を重視する姿勢こそスキゾ分析の特徴の一つではないだろうか。ジェノスコは別の場所でこのように述べている。

> スキゾ分析は、具体的な状況や生活の苦境といったものを、政治的に改善し、暫定的に置き換えていくものである。スキゾ分析家のミクロ政治的な任務は、とりわけ構成要素の主体的編成や特定の要素が変異する可能性を見極めることであり、さまざまな袋小路を突破し、冗長なものを遠ざけたり弱めたりすることで、特異性を生み出したり、引き出したりしながら、諸々の集合的編成と環境のあいだ、あるいはその内部にある通路にどのような力があるのかを調べることである。（ジェノスコ

2018:8）

スキゾ分析は、何か普遍的な構造を持った理論モデルを様々な社会的状況に当てはめるようなものではない。スキゾ分析は現実の具体的な状況を診断するものであり、分析する者によってその都度地図作成されるものである（メタ-モデル化）。それは、どのような状況で、どのような社会的実践を行うと人々はどのように思考するようになるのか（主観性）を見定めることであり、事前に結果を予測しえないからこそ、ガタリは自分の活動を絶え間ない「実験」と呼んだ。それゆえに、ガタリの思想は常に彼の様々な現実の実践に根差しており、文脈を無視して抽象的な構造だけ取り出すべきではないのである。本書のタイトルは『社会的実践の再発明――フェリックス・ガタリについてのエッセイ』である。これはまさに、本書がガタリの思想を解釈し構造を取り出したものではなく、自らの経験をもとに分析を発展させた、ギャリー・ジェノスコというひとりのスキゾ分析家の描くスキゾ分析的地図であることの表明であろう。

注

(1) ジル・ドゥルーズとの共著を通して世界的に知られることとなった、フランスの思想家、精神科医、活動家。
(2) 2019 年 10 月 31 日現在。
(3) 従来の精神分析を批判的に受容しつつ心の問題を分析するためにガタリが独自に考案した分析方法。
(4) 本章は『フェリックス・ガタリ――危機の世紀を予見した思想家』の第 5 章に収録されているものとほとんど同様の内容である。
(5) 本書の第 12 章で雑誌『ルシェルシュ』の活動の重要性を論じている点にも、ガタリにおける雑誌製作の重要性を強調するジェノスコの姿勢が現れている。
(6) 外部講師のような形で、芸術家や専門家が学校に訪れており、ジェノスコも出版業における専門家として呼ばれた。生徒が町のアートギャラリーへ行き、ワークショップを開くこともある。

参照文献

Genosko, Gary. 2018. *The Reinvention of Social Practices：Essays on Félix Guattari*. London

and New York: Rowman&Littlefield Intl.
ガタリ、フェリックス 1992『30 憶の倒錯者――ルシェルシュ 12 号より』市田良彦訳、東京：インパクト出版社。
_____ 2008『カフカの夢分析』杉村昌昭訳、東京：水声社。
ジェノスコ、ギャリー 2018『フェリックス・ガタリ――危機の世紀を予見した思想家』杉村昌昭ほか訳、東京：法政大学出版局。
ドス、フランソワ 2009『ドゥルーズとガタリ――交差的評伝』杉村昌昭訳、東京：河出書房新社。